博士学位論文審査要旨

２０１９年1月１５日

論 文 題 目： Biomedical Ethics in Cultural Diversity: The Principle of Autonomy in Islamic Culture
(文化的多様性の中の生命倫理:イスラーム文化における自己決定の原則について)
学位申請者： Rehab Abu-Hajiar
審 査 委 員：
主　査： グローバル・スタディーズ研究科　教授　内藤　正典
副　査： グローバル・スタディーズ研究科　教授　峯　陽一
副　査： 滋賀大学学長　位田　隆一
要　　旨：

本論文は全体で３部６章から構成されている。第１部は本論文の問題設定とイスラームにおける生命倫理概念を扱って、第１章で問題の背景と論文の構成を概観し、第２章では西欧とイスラームにおける生命倫理を比較しつつ論じている。第２部はイスラームにおける生命倫理の臨床適用を、生と死及び自律原則の側面から考察して、第３章では臓器移植と脳死の問題に関するイスラームの生命倫理に対するイスラーム法学の判断とは何かを詳述し、第４章では自律原則とインフォームド・コンセントに関するムスリム社会における具体的対処を述べている。第３部はケース・スタディで、第５章では、それまでに論じてきた自律原則とインフォームド・コンセントが、ムスリム社会における現実の医療の場でどのように実践されているかをトルコ、ヨルダン、パレスチナ（ガザ地区）でのフィールドワークを基にまとめている。第６章は全体の結論部分を成し、理論的考察と具体的事例とを統合しつつ、生命と医の倫理におけるイスラーム的アプローチの可能性を探るものとなっている。

本論文の意義は、イスラームの法と倫理が生命倫理の分野でどのように適用可能であるのかを理論的側面のみならず、現実の医療での知見をふまえて総合的に論じた点にある。Rehab Abu-Hajiar 氏は、脳死や臓器移植に関する自律原則の保障が、イスラーム法の原則（*usul al-fiqh*）としてシャリーアの高次元の目的を明らかにするための学知（*ilm al-maqasid*）と位置付けられるものであり、それが基本的に人間にとっての善行（*sadaqa*）のための実践でなければならないことに注目する。西欧世界では、イスラーム法が人間の理性や個人の自由を束縛するものと理解されがちだが、本来、イスラームは神と個としての人間との契約に基づいており、そこでは、個人の独立性が担保される。イスラーム法解釈は 1400 年に及ぶ歴史の中で、クルアーンとハディース（預言者ムハンマドの言行）のみならず、多くの法学者の見解を蓄積してきた。そのため、現代における医療行為の妥当性をイスラームに基づいて判断する際に、余りに煩瑣な議論に陥りがちである。著者は、この問題について、20 世紀チュニジアのイスラーム学者であるイブン・アシュールに依拠しつつ、最も重要な法源たるクルアーンとハディースに基づくことを原則とし、膨大な過去の法解釈に拘泥せず、個人の尊厳（*nafs*）のための善行として行われる医療行為を是認するべきであると提言する。

現状では、脳死と臓器移植に関するイスラーム法学見解は、概ね西欧世界での議論と類似しているが、その根拠が他者に対する善行（*sadaqa*）であり、善行自体が神の慈悲であるとの見解は興味深い。Rehab Abu-Hajiar 氏は、本論文の後半でトルコ、ヨルダン及びパレスチナ（ガザ地区）の病院で、医師に対する綿密な聞き取りを基に、上述の自律原則、及びインフォームド・コ

ンセントの実態を調査している。しかし、ムスリムが多数を占めるこれらの国（地域）での実践は、意外にもイスラーム的解釈を反映することが少ないことを明らかにしている。そのうえで、家族の紐帯を重視するムスリム社会においては、個人に帰すべき尊厳や自律が、イスラームの本質論から乖離していく現実を克服することが重要であるとの知見を示している。

これまで体系的に論じられることの少なかった生命倫理におけるイスラーム的解釈とその実践の双方を視野に入れたことで、ムスリム社会に医療と倫理の統合に向けた新たな研究視角を拓く論文となったことを審査委員は高く評価する。

よって本論文は、博士（グローバル社会研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０１９年1月１５日

論 文 題 目： Biomedical Ethics in Cultural Diversity: The Principle of Autonomy in Islamic Culture
(文化的多様性の中の生命倫理:イスラーム文化における自己決定の原則について)
学位申請者： Rehab Abu-Hajiar
審 査 委 員：
主　査：グローバル・スタディーズ研究科　教授　内藤　正典
副　査：グローバル・スタディーズ研究科　教授　峯　陽一
副　査：滋賀大学学長　位田　隆一

要　　旨：

学位申請者 Rehab Abu-Hajiar 氏に対する総合試験は 2019 年 1 月 9 日（16 時 30 分から 18 時）に実施した。

試験では、学位請求論文に関して申請者から 40 分の発表がなされ、それに対して審査委員との質疑応答を行った。そこでは、ケース・スタディとして取り上げたトルコ、ヨルダン、パレスチナ（ガザ地区）での医療が、なぜイスラーム的倫理を反映しないのか、個人と家族の意思決定における軽重とイスラーム的倫理との関係等について審査委員から質問がなされ、申請者はいずれに対しても十分な説明を行った。

総合試験は英語で行われ、申請者の研究内容に関する語学（アラビア語、英語）ともに十分な能力をもつことが認められた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： Biomedical Ethics in Cultural Diversity: The Principle of Autonomy in Islamic Culture
(文化的多様性の中の生命倫理：イスラーム文化における自己決定の原則について)

氏　　名： Rehab Abu-Hajiar

要　　旨：

This study examines how the concepts of biomedical ethics are considered in Islam and how historical Islamic medical scholars treated the concept of ethics in their practice of medicine. Moreover, this research explores the principle of autonomy in biomedical ethics as a factor in Islamic practice of medicine. The issue of autonomy in medical practice is an important topic of discussion requiring examination of the methods of its adaptation and application in Muslim-majority countries. The value and significance of this topic continues at a global level, involving Muslim communities in Non-Muslim countries experiencing religious and social diversity.

Deeper understanding of the concepts and roots contributes to the practical value and efficacy of biomedical ethics in general and the principle of autonomy in particular in diverse contemporary societies.

Historical records in Arabic in addition to the field's literature in English are utilized for the research. It is found that biomedical ethics hold significant and unique characteristics deeply connected to Sharia.

The more we understand Islamic perspectives of biomedical ethics and autonomy the more diverse communities in global societies will achieve understanding of each other. Moreover, this understanding facilitates and improves relations among medical practitioners and Muslim patients.

The fieldwork of this study was conducted in Turkey, Jordan and Gaza Strip, Palestine, investigating the subject matter with practitioners in health care sectors as well as with leading academics, researchers, non-government organizations and

policymakers.

The results indicate that the principle of autonomy is not fully implemented in the three countries from an Islamic perspective. The respective medical communities are still exploring ideas and methods of applying biomedical ethics and especially the principle of autonomy. The result of this study will be recommendations to medical practitioners in governmental and private sectors in addition to related civil societies organizations that are active in health and medical issues in Turkey, Jordan, and Gaza.